

真理による自由～熊本バンドの精神～

奨励	難波 信義【なんば・のぶよし】
奨励者紹介	日本キリスト教団須磨教会牧師

イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

(ヨハネによる福音書 8章31—38節)

熊本バンド

本日は、宗教改革記念日ではありますが、今回は同志社スピリット・ウィークでもあります。私がここに立っているのも、「宗教改革記念日だから」ということではなく、同志社スピリット・ウィークの中で「同志社を学び、知る」ということであります。すでにタイトルにも記していますように、熊本バンドの話をするために、ここに招かれました。

私は現在、神戸市須磨区にあり須磨教会の牧師をしておりますが、今年の3月まで、熊本草葉町教会の牧師でありました。同時に、熊本バンド記念行事実行委員長もさせていただいております。

2010年度に熊本に赴任してから、繰り返し「同志社なくして熊本バンドなし。熊本バンドなくして同志社なし」という言葉を聞きました。同志社と熊本バンドは切っても切れない関係にあることを、実に分かりやすく表現したものだと思います。熊本バンドをご存知ない方からすれば、いきなり何を言っているのか分からないかもしれませんが、143年前に同志社が設立されていなかったら、熊本の花岡山山頂で誓い合った青年たちは行き場を失いバラバラになっていたでしょう。あるいは、優秀な熊本バンドの青年たちが同志社に入学していなかったら、現在の同志社はなかったかもしれません。「同志社なくして熊本バンドなし。熊本バンドなくして同志社なし」。

それでは一体、熊本バンドとは何なのでしょう。「それは、ウィキペディアで調べてください」と、熊本の教会に赴任した当初は、そのように答えようとしたこともありましたが。何しろ、熊本草葉町教会は「熊本バンドの伝統を継承する教会」と呼ばれていましたので、何となくは理解しつつも、「そもそも、熊本バンドとはなんぞや」と聞かれると途端に口ごもってしまう。本当に、熊本草葉町教会に赴任した当初は、そんな状態でありました。

そもそも日本史が苦手な私は、同志社大学在学中も、そのような歴史については興味もなく過ごしていましたので、全く知らない。ところが熊本バンドの精神を継承する熊本草葉町教会に赴任してしまったために、大慌てで勉強することになりました。とは言いますが、私は研究者でも専門家でもありませんから、今日も、ある意味開き直りつつ、初歩的なお話をさせていただきます。

奉教趣意書

熊本草葉町教会は、今年、創立133年を迎えました。1885年、辻密太郎が講義所を開いたことが始まりとされています。この時、辻密太郎はまだ学生（同志社の学生）でありまして、彼を信頼して熊本への伝道のために送り出したのが、新島襄であり、同志社でありました。

また、さらにさかのぼれば、熊本は同志社のもう一つの源流と呼ばれる熊本バンド発祥の地でもあります。1871年に設立された熊本洋学校で、アメリカ退役軍人であったL・L・ジェーンズから学んだ青年たちがいました。その中でも、特にジェーンズの感化によってキリスト教を受け入れた青年たちは、その思いを「奉教趣意書」という文章にまとめ、1876年1月30日、花岡山で行われた祈禱会で、これを朗読して、誓いを立てました。この「奉教趣意書」は同志社に保管されていますから、機会があればご覧ください。私も原本は見たことがありませんが、そのレプリカが熊本草葉町教会の礼拝堂に飾られています。

今日は参考資料として、この奉教趣意書の全文をプリントしたものを、受付でお配りしました。

「余輩嘗て西教ヲ学ブニ頗ル悟ル所アリ 爾後之ヲ誦ムニ益感発シ欣戴措カズ 遂ニ此ノ教ヲ 皇国ニ布キ 大ニ人民ノ蒙味ヲ開カント欲ス・・・」

はっきり言いますが、私のような年代の者では、何を言っているのかさっぱり分からない文書ですし、読むだけでも大変です。ここには、日本という国家とキリスト教、また彼ら自身の使命が書かれています。

分かりにくいので現代語訳を見ましょう。

「我々が、キリスト教を学んだところ、大変教えられるところがあった。以後、これを学べば学ぶほど喜びが得られる。そこで、このキリスト教を日本の国中に伝道し、文明を知り文化を得てほしいと考えるに到った。

しかしながら、キリスト教の深い真理を知らずして、古い伝統と習慣にしばられている人々が少なくない。我ら新しい真理を知った者として、この真理を知らない人々の現状を見るに、いたたまれないもどかしさを感じる。この際、我ら、新しい大きな使命になう青年は、一大決心をし生命がけでキリスト教が公明正大な宗教であることを、明確にしてゆかねばならない。この決意の実行に、我々はもつとも力を尽くすつもりである」。

前半部分だけをお読みしましたが、ここには自分たちの信仰をもって、日本を対象とした宣教、日本にキリスト教を伝えていこうとの決意が記されています。

熊本洋学校

今から142年前という時代の、そして当時においては一流とも言うべき教育を受けた青年たちです。熊本洋学校の授業は、1年目の英語の徹底的な習得から始まり、2年目は地理や数学の基礎、3年目は幾何学や測量、4年目は哲学、物理、天文学、地質学、化学、生理学などなど。全部、ジェーンズの担当です。もちろんすべて英語での授業です。日本語を知らない教師が、英語を知らない生徒に教える、それがどれほど困難なことであったかを思います。実際多くの中退者を出すわけですが、それはつまり卒業した者たちは、それらすべてを習得したということです。

実際ジェーンズは、熊本洋学校の生徒たちについて「本校生徒達の学力は之を同年齢の米国学生に比ぶるに、科学の知識に於ても、敢ていう語学そのものゝ力に於ても、聊も遜色は無い」（『熊本バンドを懐く』復刻版 同志社 2009年 19頁）と、得意満面で講演したという記録がありますから、本当に優秀な青年たちと言えるでしょう。

ただ、こういう真面目さというのでしょうか、堅さというのでしょうか、それは単に時代がそうだったとか、知識階級の特徴だったとか、そういうことではありません。後ほど触れますが、同じ頃にできた同志社の、そこに集まっている学生たちについて「数名のものを除けば、不良学生の寄り集まりであった」と、そんな回想をしている熊本バンドのメンバーがいます（同前38頁）。そのように考えますと、熊本洋学校で学んだ青年たちは、本当に真面目だったと言いますが、あるいは先ほどの奉教趣意書にもありましたように、キリスト教信仰に熱心であった、真っ直ぐであったと言えるでしょう。

こういう熱心さ、真っ直ぐさ、真面目さはどこからくるのか。それはジェーンズの教育によるものです。彼は元軍人でしたが、それ以前に、彼自身が勤勉で、真面目で、そういうところから規律を重んじる・・・、そういうことをとても大切に、教育しているのです。そんな教育方法について、こんな回想録が残っています。「それは恰も將軍が部下兵士を訓練する時のようで、たゞ厳格という他はなかった」（同 18頁）と。特に、熊本洋学校は学びに集中するために、全員が寮で生活をしていました。この寮内の規律は大変厳しいものであったようで、外出にも、いちいち寮長の許可が必要だったと言います。しかし、そういう厳しさだけではなく、生徒たちに病人が出れば、毎日のようにお見舞いに行き、体力をつけるための栄養品や果物を届けると言います。あるいは、ジェーンズはただ教え込むということではなく、生徒一人ひとりの自発的研究、自主学習をとても大切にしました。ですから軍人ばりの上から押しつけるような教育ではなく、一定の規律をもちつつも、しかし一人ひとりに真に自由に生き生きと学んだのです。

同志社へ

こういう地盤が、同志社へと入学した際に生きてきたのです。前後しますが、1876年1月30日の花岡山での結盟は、当時の社会に衝撃を与えます。西洋文化を取り入れる教育には熱心な熊本でしたが、もともと保守的な土柄であり（大きな声では言えませんが、それは今もそうです）、「キリスト教なんてとんでもない」という空気に満ちていました。ですから奉教趣意書によって「キリスト教を国中に広めるんだ」「キリスト教を土台としてこの国を導くんだ」というような決意表明に対して「とんでもない輩が現れた」と迫害が起こり、熊本洋学校は閉鎖に追い込まれてしまいます。それでもキリスト教信仰に燃える青年たちを前に、ジェーンズは同志社に紹介状を送り、彼らを同志社に入学させたのです。同志社が創立して1年も経たないうちの出来事でした。

しかし先ほども触れましたように、開校間もない同志社の学生たちは「数名のものを除けば、不良学生の寄り集まりであった」と言われるような状態で、規律も何もなく、そこで学ん

でいた者たちは明らかに履き違えた「自由」の中で過ごしていましたので、熊本から来た青年たちにとって大いに不満でありました。思想家として知られる徳富蘇峰も、熊本洋学校で学び、そこから同志社にきた熊本バンドのメンバーですが、彼は同志社に幻滅して卒業を目前に自主退学しています。いろいろな不満があったようですが、教育内容、その低さも理由として挙げられています。

徳富蘇峰に限らず熊本から来た一行は、同志社の宣教師たちから厄介者として扱われていました。何しろ熊本洋学校ですでに一流の教育を受けて、一定の課程を修了した青年たちでした。教科によっては教えている同志社の教師陣（宣教師たち）よりも優れていたのです。それを鼻にかけて時に教師さえ軽んじる態度を取る者がいました。そこで同志社の教師たちは「熊本から来た厄介者の集団」という意味で「熊本バンド」と呼んだのです。これが「熊本バンド」という呼び名の始まりです。

この熊本バンドのメンバーは同志社に不満をもって「やめてしまおう」「退学しよう」と話し合い、熊本時代の恩師であるジェーンズに相談しますが、ジェーンズは厳しく応えませんでした。「私に勧められたから同志社に来たという者がいれば、即刻荷物をまとめて帰りなさい。自分で選んで同志社に来たというのなら、学校を良くするように働きかけるべきではないか」と。これは、私には「一人ひとりの信仰と、自己責任において、もっと自由にやってみなさい」という言葉として響いてきます。実際彼らは、この言葉によって目覚め、同志社を改革していったのです。禁酒禁煙。門限も定め、起床時間や就寝時間まで決めました。これは極端な例かもしれませんが、とにかく「自己責任における自由」というものを、徹底していったのです。そしてこの時に定めた規則が、そのまま初代同志社の規則となって運営されたのです。

同志社へ

こういう地盤が、同志社へと入学した際に生きてきたのです。前後しますが、1876年1月30日の花岡山での結盟は、当時の社会に衝撃を与えます。西洋文化を取り入れる教育には熱心な熊本でしたが、もともと保守的な土地柄であり（大きな声では言えませんが、それは今もそうです）、「キリスト教なんてとんでもない」という空気に満ちていました。ですから奉教趣意書によって「キリスト教を国中に広めるんだ」「キリスト教を土台としてこの国を導くんだ」というような決意表明に対して「とんでもない輩が現れた」と迫害が起こり、熊本洋学校は閉鎖に追い込まれてしまいます。それでもキリスト教信仰に燃える青年たちを前に、ジェーンズは同志社に紹介状を送り、彼らを同志社に入学させたのです。同志社が創立して1年も経たないうちの出来事でした。

しかし先ほども触れましたように、開校間もない同志社の学生たちは「数名のものを除けば、不良学生の寄り集まりであった」と言われるような状態で、規律も何もなく、そこで学んでいた者たちは明らかに履き違えた「自由」の中で過ごしていましたので、熊本から来た青年たちにとって大いに不満でありました。思想家として知られる徳富蘇峰も、熊本洋学校で学び、そこから同志社にきた熊本バンドのメンバーですが、彼は同志社に幻滅して卒業を目前に自主退学しています。いろいろな不満があったようですが、教育内容、その低さも理由として挙げられています。

徳富蘇峰に限らず熊本から来た一行は、同志社の宣教師たちから厄介者として扱われていました。何しろ熊本洋学校ですでに一流の教育を受けて、一定の課程を修了した青年たちでした。教科によっては教えている同志社の教師陣（宣教師たち）よりも優れていたのです。それを鼻にかけて時に教師さえ軽んじる態度を取る者がいました。そこで同志社の教師たちは「熊本から来た厄介者の集団」という意味で「熊本バンド」と呼んだのです。これが「熊本バンド」という呼び名の始まりです。

この熊本バンドのメンバーは同志社に不満をもって「やめてしまおう」「退学しよう」と話し合い、熊本時代の恩師であるジェーンズに相談しますが、ジェーンズは厳しく応えませんでした。「私に勧められたから同志社に来たという者がいれば、即刻荷物をまとめて帰りなさい。自分で選んで同志社に来たというのなら、学校を良くするように働きかけるべきではないか」と。これは、私には「一人ひとりの信仰と、自己責任において、もっと自由にやってみなさい」という言葉として響いてきます。実際彼らは、この言葉によって目覚め、同志社を改革していったのです。禁酒禁煙。門限も定め、起床時間や就寝時間まで決めました。これは極端な例かもしれませんが、とにかく「自己責任における自由」というものを、徹底していったのです。そしてこの時に定めた規則が、そのまま初代同志社の規則となって運営されたのです。

わたしの言葉にとどまるならば

いろいろと調べつつ、こういったことを知っていく中で、最初にお読みした聖書が示されました。「真理はあなたたちを自由にする」。この言葉は、これだけで有名ですし、キリスト教主義の学校や団体でも、この言葉をスローガンに掲げている所もあります。

イエスさまは言われるのです。「真理はあなたたちを自由にする」と。私たちはこの聖書の言葉に、心が解放されたような思いをもつことができたり、または真理を探究しようと自らを奮い起こす、前向きな思いになるでしょう。

ところが、このようにイエスさまが語ったことによって、怒り出した人々がいたのです。「俺たちは何も不自由ではない。それなのになぜ『あなたたちを自由にする』なんて言うんだ。俺たちは今すでに自由だ。自由に生きている」と。それに対してイエスさまは「あなたたちは罪の奴隷になっている」と語られました。

イエスさまの言葉に怒り出した人々、反論した人々は当時、とても信仰熱心な生き方をしていた人々でした。聖書を読むことも大切に、聖書の教えを忠実に守って生きていました。その人々に対して「あなたたちは罪の奴隷になっている」とイエスさまは言われたのです。

「罪」などと言いますと、ちょっとドキッとしますが、聖書の言う「罪」とは「的外れ」という意味の言葉です。「的外れに」、すなわち「神さまの方をまっすぐに向いていない」「神さまから顔を背けている」、そういう状態が「罪」だと言うのです。

しかし今言いましたように、この人々はとても信仰熱心で、聖書の教えに忠実に生きていました。一体どういうことなのでしょう。「熱心さのあまり」と言えばお気づきになるかもしれませんが、あまりにも聖書の教えにこだわりすぎてしまって、本来向くべき神さまの方には向いていなかった、ということです。聖書の教えに忠実に生きて、それで満足してしまっていた。そういう信仰熱心な自分の姿に酔っていた。「これこそが正しい生き方だ」「これこそが信仰的な生き方だ」と自分の信仰熱心さを比べ合い、神さまの存在を忘れてしまっていた。熱心さのあまり、本当に大切なことを忘れてしまっていた。

このことは、現代に生きる私たちも、気をつけなければならないことだと思えます。この場面に描かれる人々のように、固定観念に捕らわれ機械的に生きてしまっていないだろうか。「当たり前」「これが普通」という感情だけで。もちろん生きてきた経験をおして獲得していった、経験的な判断も大切です。しかし時にそれが、自分の尺度のみで他者（隣人）を計るという、危険な状態を生むのです。自分の中の「当たり前」とか「普通」の基準をもって、他者を勝手に定義付け、最終的には「あなたはだめだ」とか「あなたはよい」と、人を裁くことをしてしまっていないでしょうか。それでは、今日の場面でイエスさまに反論した人々と同じであります。

私たちがそのような状態に陥らないように、イエスさまは言われるのです。「真理はあなたたちを自由にする」と。イエスさまが人々の固定観念を激しく揺さぶったように、生きて在る真理は私たちに自由にするのです。

それでは、その「真理」とは何か。それは、今日の場面でイエスさまが最初に語っておられるように、「わたしの言葉にとどまるならば」という言葉が示すとおりです。イエスさまの言葉にとどまること、それが真理なのです。先ほど「このイエスさまの言葉は、非常に有名な言葉だ」と言いました。「真理はあなたたちを自由にする」。このフレーズだけが有名になっているのは事実ですが、最も大切なことは、その前にある大前提となっている言葉、「わたしの言葉にとどまるならば」という言葉です。イエスさまの言葉にとどまって、初めて私たちは真理を知り、初めて私たちは自由になるのです。

イエスさまは私たちに語りかけているのです。「わたしの言葉にとどまりなさい」と。そして「あらゆる概念、あらゆる束縛から、真に自由であり続けなさい」と語っておられるのです。熊本バンドの青年たちは、熊本の地に在る時から、信仰に堅く立って、イエスさまの言葉にとどまりつつ、真に自由に、のびのびと学びました。そして同志社に移ってから、イエスさまの言葉にとどまりつつ、真に自由に、のびのびと学びました。

神には誠実に人には愛を

この熊本バンドのメンバーの一人、そして花岡山での結盟の際にリーダーとしてその最初に署名をしている宮川輝輝は、後に、この奉教趣意書の意味について、このように語っています。

「（奉教趣意書）何を意味するかとお尋ねになったならば、神に対しては神の子たる人格を養ひ、人間に対しては動かない性格を養ひ、其の性格は愛に依って立ち、愛と共に此の世界の中に活動を現して行く。其の意志と愛との並行を意味するものである。

私共は、人類の為に、一命を損つるまでおしなされたるキリストを信じた為に、我もキリストに倣って、一ツ命を損つる所までやらなければならない」（『徳富蘇峰の師友たち』—「神戸バンド」と「熊本バンド」— 教文館 2013年 193頁）。

ちょっとややこしい言い回しでしたが、つまり奉教趣意書は「神に対しては誠実さを誓い、人に対しては愛に生き、それを実生活の中で現していくことだ」と私は読みました。さらにその根拠は「人間のために命を捨てたキリストであり、私たちもそれにならって生きる以上、命をかけて、それをしなければならぬのだ」というのです。「神に対しては誠実さを誓い、人に対しては愛に生き、それを実生活の中で現していく」。熊本バンドの精神に生きるといのは、こういうことなんだと、改めて考えさせられています。

「神に対しては誠実さを誓い、人に対しては愛に生き、それを実生活の中で現していく」。そしてイエスさまは言われます。「わたしの言葉にとどまりなさい」と。

今日、イエスさまの言葉に触れた私たち、そして熊本バンドの青年たちに触れた私たちは、ここから、不自由な自由ではなく、真に自由に生きる、そんな歩みを成していきたいと思えます。